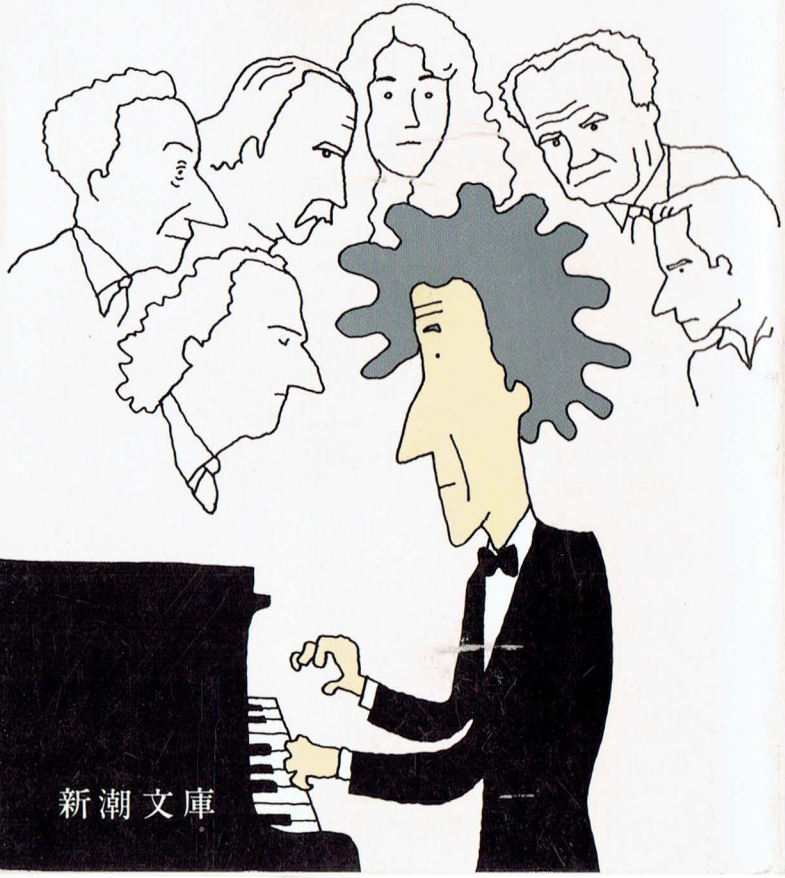
世界のピアニスト

吉田秀和



新潮文庫

世界のピアニスト

吉田秀和

よ 6 3

新潮文庫

242
—3—

560

ポリーニ、アルゲリッチ、グールドなど現代の代表的ピアニスト59人を俎上に、その芸術の特性と魅力を縦横に論じる。単にその時々の演奏のうまいへただけでなく、ピアノ演奏史をふり返り、作品論に立ち寄り、他のピアニストとの比較を試みつつ、演奏家の精神の内面に分け入り、さらには文化的背景の考察にまで及ぶ。ピアニストごとに本文中でふれたレコードの一覧を付す。

ISBN4-10-124203-8 C0173 ¥560E 定価560円

クラウス［Klaus Lulj］

リリー・クラウスはオボーリンと半年ほどしか年齢が違わないのですね。しかし、彼女は、昔から日本のファンにはよく知られていました。クラウスは、それこそ花のような若い女性だったころからなじみのピアニストでした。戦後も数え切れないほど何回も日本に来て演奏会をひらいた。

若いころの演奏は僕もレコードくらいしか知らなくて、ラジオなどで聴いて、とても感心して、きれいだと思いました。当時、これも若くて颯爽としていたヴァイオリニストのシモン・ゴールドベルクと合わせて、モーツァルトのヴァイオリン・ソナタの全曲などを弾いたあのころは——日支事変が始まっているときだと思います——会場はガラガラで、ステージの上をねずみが走るのが見えたという話があるくらいですけれど、新しいノイエ・ザハリヒカイトの音楽づくりで、シモン・ゴールドベルクと合わせて、ほんとに新鮮なモーツァルトを聴かせてくれました。戦後日本にきたときは、ちょうど、かつてマイラ・ヘスが若いときそうであったであろうと想像されるように、リリー・クラウスもほんとうにヨーロッパふう

な貴婦人でした。貴族かどうか知りませんが、まるで貴族みたいな物腰の、どんなサロンに出てもおかしくないレディとして立派に通じるピアニストですね。話し方から、身のこなしかたから、華やかな雰囲気がありましてね。それに如才なくて、頭が非常によくて、そうして人柄のよい、バランスのとれた、自分の感情も強いけれど押えることもできる、話題も広く、もう実にりっぱな人柄です。

しかしこのごろの彼女のピアノは荒くなりましたね。どうしてでしょうか。ちょっと年をとった上に、日本に来るとあまりにも人気が高くお客さんが多いためか、スケジュールをみても、強行軍すぎますよね。こういう存在は、マネージャーがもう少し大事にしなければいけない。すこし無理させすぎます。彼女とすれば忙しければ忙しいなりに、うれしいんでしょうね。だいたい芸術家というのはみなそうです。前にもお話したように、年をとって引退興行を何年も続けるというのが芸術家というものですからね。だから、少し自分に下手なところがあっても、みんながこんなに喜んでくれるのだから弾きましょう、ということになるんでしょうが、しかし、やはり限度というものがあります。このごろの彼女をみていると、晩節をけがさなければいいがと思ってしまう。

もともと、いままで並べてみてきたブライロフスキーとかイーヴ・ナットとかいう人とくらべるほどの大ピアニストではないんですね。ないけれども、ひとつの確固とした自分のものを持った人で、音楽と技術とがピッタリしたバランスのとれた、そういう意味の良いピアニストなのですが。それに、いくら年をとっても、この人のテンペラメントが失われていないところは、技術の乱れはあっても、音楽をやってゆく上で、一番のものは何を弾いているかということがはっきり伝わってくる人でなければいけないわけですが、彼女の演奏は、疲れてガタガタになっている時でも、自分はこういうことを弾こうとしているのだということがはっきりわかりますからね。何しているのかわからないということはないですよ。それが気持だけではなく、意識がはっきり表現されています。僕は、彼女のモーツァルトが特に好きだというわけでもないですけれど、といって、もっと大きな厚い音の音楽というものが彼女に向かないことも事実ですね。モーツァルトは、いってみれば三和音のほかは、右手と左手がそれぞれ一本の線を描いているような作法ですからね。そういう音楽がこの人に合うのであって、ハーモニーの厚い音、たとえばリストとかブラームスのような音楽は、あまり得意じゃないでしょう。

そう考えると、モーツァルトでなければバッハでもよかったのかもしれませんが、バッハは彼女のありあまるほどのテンペラメントを乗せてゆくには、少し抽象的、知的な音楽でありすぎるんでしょうね。シューベルトの『即興曲』とか『レントラー舞曲』のレコードがあるそうですが、そういうものはいいでしょうね。この人はブダペストの生まれであり、今の世界の政治的地図からいってブダペストはハンガリーの首都であるから、ハンガリー人だということになっているけれど、しかし彼女の芸術的文化的故郷というのはやはりヴィーンです。だからブダペスト出身といっても、オーストリア・ハンガリー帝国だった時代の中央のブダペストですね。そこからミュンヘンや南ドイツまで続いている中央の音楽文化の中心に

入る人です。それもリストであるよりはもっとシューベルト、その他のヴィーンの音楽に近い人です。弾き方としては、いわゆるヴィーン派の音楽ではないわけですけれども、彼女が育ったまわりでは、シューベルトをみんなが弾くような時代ではなかったでしょうか。この人は情緒的なものにおぼれる人ではないですから、シューベルトの小品などはいいでしょうね。

シューベルトにはレントラーのような小品がたくさんあるわけですが、こういう小品は、ほんとによい音楽だと思います。ヨハン・シュトラウスのワルツなどより、ずっと芸術としてよいと思うのです。中には単純な、なんということもない曲もありますけれど、多くの場合、あっというほどの転調だとか、ものすごくきれいな節回しだとかがあります。ただシューベルトは、ほかのところでは、もう少し短かくてもよかったと思うものがあるのに、小品となると、逆に短かすぎてもう少し、と思うのに終わってしまうことが少なくない。ある着想が湧くと、それだけで書いてしまって、おしまいなのですね。和歌よりは俳句に近いようなもの。

いまいったように、リリー・クラウスを見ていますと、ヴィーンの貴婦人だなという気がします。いま僕が知っているピアニストの中では、一番そういう雰囲気のあるピアニストです。ヘブラーにも何ともいえない気品と雰囲気がありますが、より市民的で、より穏やかなものになっている。クラウスのは、もっと才気ばり、華やかです。もっとも、私は、二人ともどちらがどちらと言えないほど、すぐれた知性にめぐまれた女性だと信じていますが。ヘブラーは、ヴィーンがもうヨーロッパの中心でなくなったときの人ですからね。クラウスには、昔のヴィーンのおもかげが、まだしも残っています。一九〇八年の生まれというのですから、第一次大戦の終わったときだって、まだ十歳にもなってなかったんでしょうが。

あの人は、馬に乗ってハンガリーの平原などを走ることもできたにちがいないと思いますよ。最上の時のあの人のピアノをきいていると、私には、長靴をはいて、むちをもって、女の人特有の乗馬の帽子をかぶって走る風景が目に浮んできます。それがヘブラーとなるとちょっと違うんですね。彼女にもヴィーン風なところ――おそらく菓子だとかお料理など作ったらすごく上手だという具合の伝統――は、まだ残っているかもしれませんが。

ヘブラー〔Haebler Ingrid〕

ヘブラーはクラウスに比べれば、もうひとつ若い世代ですね。そしてクラウスよりは、はるかにスケールが小さいですよ。それだけに考えつめた音楽をやっていて、よく整理されて

います。自分が何をやってるかということは、クラウスも知っている。が、ヘブラーはもっとよく知っているという感じがします。以前、読売新聞で時評をやっていたころ書きましたが、彼女はまるで金銀の飾り職人が、細い糸のような金や銀を使って昔ながらの模様を作ったり、ものの形を作ったりする。そういう具合にモーツァルトを弾くんですね。モーツァルトの音楽が生まれてきた当時は、ああいうものではなくて、もっと生き生きとした流れのものだったと思うんですが、ヘブラーがやるとそういうものではなくて、出来ているものをもう一度ときほぐして、そのときほぐした線で、再び作りなおしてゆくというところがあって、それが少し彼女の音楽を小さくしているという気がします。けれども逆にいうと、これは、考えるだけ考えて、形の上からも内容の上からも、きちっと整理してやっている点で、ほんとうに正直な音楽家ですね。そして何事につけても妥協せず徹底的にやっています。できないことはやらない。できるところは最後のところまで努力して、磨きたて、ぴちっとしたものにして聴かせる。この人は自分の能力の限りをつくして弾いていて、ごまかしのない立派な音楽家だと思います。

日本ではよく、女性一般から割り出して、ピアニスト・ヘブラーを論じようとするところがあります。それが必ずしも間違いということはできないけれど、男であろうと女であろうと、自分が天才でないどころか、人並み優れて恵まれているわけではないということをはっきりわきまえていて、その上で自分の力のありたけをつくして、ごまかしのない演奏をしていることは、ほんとに立派な人だと思います。

けれども、彼女は一流のピアニストはおろか、名ピアニストではないですね。このごろはよくモーツァルトのほかに前期古典派というか、クリスチャン・バッハとか、そのほかハイドンなどを軽いピアノで弾いていますね。チェンバロとピアノの中間みたいなピアノで、それがモーツァルトなどが生きていたころのピアノというのでしょう。しかし、現代のジャーナリズムや音楽のマーケットには歓迎されないのではないかしら。やはりスタインウェイのような立派なピアノ、あの音色で聴かせた方が、みんなが喜ぶでしょう。軽いもので弾くと、ちょっと別ものということになってしまうのではないでしょうか。しかし彼女にはそういうピアノで弾く理由があるんですね。自分の良心ということで音楽をやってゆく上で、ハイドンやなにかを、ほんとにハイドンらしくよく弾こうということになると、自分のテクニックをたえず厳しく磨いていることと同じくらいに、それを出す楽器もやはりこういう（スタインウェイのような）ものではいけない、という考えになるのは、不思議ではない。だが、そっちの方に入ってゆくと、マーケットからはあまり喜ばれないということになりはしまいか。そういう問題を今後どう解決してゆくか。

それに、彼女のピアノのテクニックからいっても音楽の性格からいっても、ああいう軽いピアノの方がいいのでしょう。ということは大きな重い音を土台にして、音色の輝かしさで聴かせるということは、彼女のピアニズムとはちがうことなのです。それにもかかわらず、いつまでもモーツァルトを売りものにするというのでなくて、シューマンの【子供の情景】だとか、若いころのベートーヴェンの協奏曲だとか、あるいはシューベルトだとか、ドビュ

ッシーの『ベルガマスク組曲』だとかというようにして、彼女はたえず工夫し、研究して、レパートリーを拡げる努力をしていますね。

いままで音楽の知的なことばかりをいいましたけれど、芸術家としての直感力の世界、勘の良さという点では、この人はクラウスに及ばないようです。クラウスは音にむらがあったり、乱暴なピアノになったりしますけれど、勘でつかむ力は非常なものがあるのです。ヘブラーはそうではなくて、地道に一歩一歩作ってゆくほうです。傷は少ないけれど、飛躍もあんまりない。この二人は、その点でも対蹠的だけれど、それぞれ自分に忠実で、自分を偽らない点、共に立派ですね。